

お茶の水女子大学高大連携特別選抜制度をめぐって

永野 肇

はじめに

本紀要創刊号（1955年）の巻頭で、蠟山正道学長は「紀要の発刊に際して」と題して附属高等学校の持つ使命について次のように述べている。「附属学校については大きな問題がない。しかし、そういう平穩無事にいつているということ自体から問題が発生するように思われる。なぜなら、そういう状態は一種の過去の伝統の重みと先輩の努力の蓄積による惰性に過ぎないから、やがて停頓し、時代遅れとなるおそれがある。明治二十六年以来、附属高校は、単に「優良ナル子女ヲ養成スル」ためばかりでなく、『女子普通教育ノ方法ノ研究ニ資スル』ということが明記されている。この「女子普通教育ノ方法ノ研究ニ資スル」ということを昭和三十年の今日の状況において再検討し、そこに実証的な研究成果をあげねばならぬ使命があるのである。」昭和三十年から半世紀を経た今日、「社会の諸分野における有為にして教養高き女子を育成」することを学則にうたっているお茶の水女子大学では、その研究開発の一端として附属高校と高大連携特別教育プログラムを実施している。

このプログラムのうち、高校における学校設定科目である教養基礎3教科（英数国）は、2004年度の試行から数えると、今年度の3年生で3年目になるが、一部はまだ実施されておらず、来年度にカリキュラムが整う予定である。

特別入学者選抜については、本学中期計画「附属高等学校の生徒に対して、大学が設けた教育プログラムを受けさせることによって、優秀な学力を持ち、かつ勉学に対する意欲やプレゼンテーション能力を持つ者を判定した上で、進学を認定するシステムの開発とその設置について検討する。」を受けて設置を確定し、2008年度からの実施が決まっている。その前段階としての選択基礎（大学各学科による授業）は、2007年度から試行実施されている。この仕組みについては、本学設置の高大連携実施委員会が審議し原案を作成している。

今年度の歩み

今年度は、試行学年希望者を対象として選択基礎が試行実施され、2名が受講した。途中で1名が意欲を失ったが、1名は受講を続け、一般推薦入試でお茶の水女子大学を受験、合格した。年度末には選択基礎第1号修了証を授与され、大学2単位分を修得した。高大連携実施委員会では、この2名および試行実施の2学科を対象としたシステムについて評価方法を含めて検討をし、11月下旬にはシステムを確定、全教授会の合意のもとに高校で選択基礎受講者の希望を徴した。結果的に9名（5学科）の来年

度受講者が決まって4月からの開講を待っている。従来、附属高等学校からのお茶の水女子大学入学者数は、毎年4、5名程度であったが、この特別選抜制度により高大連携特別教育プログラムの有効性を追跡するに十分な数の学生が進学するものと考えている。

来年度に向けて

選択基礎受講条件が揺れたこともあり、今年度は、仕組みが大学教員全員に周知できていなかった。実施委員会では今年度の反省を踏まえて仕組みの改善と周知を図ろうとしている。特別選抜の募集要項は今夏までに完成させる必要があるので、当面それに向けて動くことになる。9名の生徒が選択基礎によってどう育っていくか、フォローも含めた指導と評価をしていかなければならない。本校新聞部は年度末の特集記事として高大連携を取り上げており、それによると、特別選抜出願の希望を持つ1年生は23%（27名）であり、生徒の関心も高まりつつあることがうかがえる。教員も、制度作りの段階では担当者が担ってきたが、今後は担任を中心にするよう組織を変革、移行しつつある。

午後3時過ぎに開講する大学授業の一部については、公開授業として高校生（2年生以上）にも参加を認めている。来年度はこの公開授業の数が増え、附属高校生に門戸を開こうとする大学側の姿勢が強まっている。

高大間の交流規模が大きくなると、問題も増えるに違いないが、校長として、大学・高校の間に入ってよりよい解決と仕組み作りにあたっていきたい。